若手コーナー

開業顛末記

外間眼科医院崇元寺　外間　英之

志があるのだかないのだか、幼少時より祖父や父の後を継ぎ眼科医院を開業することを目標にしていました。父は自宅開業でしたので仕事や患者さんの話は折に触れよく聞かされていましたし、祖父も「君で3代目だ、頑張りなさいよー。」とよくいわれていましたので、当然のように考えていたのです。ですから大学の医局に入った当初もなるべく早く臨床を覚え、手術手技を習得してすぐに開業してしまおうなどと思っていました。この辺が自分の志の低さを実感する所以ですが、さすがに医局の先輩方はお見通しでした。そんな私の計画は露と消え、臨床はもとより実験や臨床統計、学会発表のあとは矢のような論文の催促と大変忙しい日々を過ごさせていただきました。よく体がもったな～と思いますが、おかげで学位もいただきましたし、何より眼科の中でも多岐にわたる各専門分野の先生方に学べたことは大きな財産になりました。急がばまわれ、石の上にも3年ですね。

沖縄には平成18年1月に帰りました。地元ではありますが県内の医療事情もわからず、医療関係の知人も少ないという寂しい事情から、琉球大学の眼科に入局させていただき約2年間県立北部病院と沖縄赤十字病院でお世話になりました。どちらも眼科は一人体制でしたので忙しい時期もありましたが、医局の先生や開業医の先生と顔見知りになり、とても有意義であったと思います。

さていよいよ開業準備に入り、まずは候補地選びです。本来であれば父の外間眼科医院をそのまま引き継ぐことが最良ですが、日帰り手術をやりたいという私の希望とはなかなか立地が合いません。しかし、いずれ父の患者さんを引き受けたいという考えもあり、なるべく近隣で探していたところ、幸いにも希望通りの物件が実家の隣町である泊にみつかり、快く貸していただけることになりました。思えば祖父が牧志に父が前島に開業し、私が泊です。時代の流れとともに外間眼科医院は那覇の繁華街に向かって500mづつ移動しているのです。我が子はどこにいくのでしょうか。

それから半年間は勤務医をしながら週に1～2回の打ち合わせ（その後の飲み会も含む）や銀行通いと大変でしたが、目標に向かっている充実感でいっぱいでした。特に内装の設計は楽しく、今まで温めていたアイデアが現実になる喜びはひとしおです。それに気に入った機械で気のあったスタッフと仕事ができるなんて夢のようです。

そんなこんなで平成20年7月10日に開業して1年半が経ちました。初めの1年は日常の診療・手術を問題なくできるように施設整備に追われていました。スタッフの採用や機材の購入、診療所のルール作り、果てはホームページや看板などの宣伝までおおよそ医療とは関係ないようなことばかりでしたが、比較的楽しみながらやっていました。昔からコツコツと何かを作る作業は好きでしたので性に合っていたのでしょう。しかし1年も経過しますと莫大な借金の返済も始まり、今度は経営に追われております。いまだに毎日の患者数や手術件数には一喜一憂の日々ですが何とかやっています。

開業して変わったことは第一に患者さんでしょうか。医局からの出張では定期的に異動があ

りますので、その場で懸命にやっていてもその後がわかりません。特に苦労した患者さんは、今頃どうしているかなーなんて思い出します。しかし開業してからは、今後来てくれるかぎりずっと責任を持って診なくてはいけません。治らない、治せない患者さんともずっと付き合わなければいけません。身の引き締まる思いです。「あんたのお祖父さんから通っているよ。あんたで3人目さ～。よろしくお願いしますよ。」なんてお年寄りもいます。「○○さんから、上等って勧められてきたよ。」という患者さんも来ます。泣けてくるほどうれしくなりますし、ずっしりと重く感じることもあります。何事もなければ30年はこの生活が続くのです。父を含め、先輩方の苦労が少しはわかった気がします。

次に変わったことはコツコツ勉強するようになったことです。今まで自由に学会にも顔を出していましたが、なかなか不自由になりました。必然的に医学雑誌や教科書を読みあさっています。すると目からウロコ！なことが多々あるのです。情けない限り。これからも先端とまではいかなくとも常に新しい治療や技術にチャレンジしていきたいと思います。また、開業時の挨拶に地域医療への貢献などと軽く言いましたが、大変そうです。そちらの方も今後よろしくお願いいたします。

原稿募集！

「若手コーナー」（1,500字程度）の原稿を随時、募集いたします。開業顛末記、今後の進路を決める先生方へのアドバイス等についてご寄稿下さい。